

# 多聞院英俊が見た一小領主

大和国山辺郡備前村衛門太郎の活動の軌跡

幡鎌一弘

A Minor Feudal Lord Observed by Tamon-in Eishun: The Trace of Activities of Yamato-no-kuni Yamanobe-gun Bizen-mura Emontaro

はじめに

- ① 備前氏の家族関係の復元
- ② 村落の内部構造
- ③ 『多聞院日記』での備前氏  
おわりに

## 【論文要旨】

本稿は、戦国末期に南都興福寺の僧侶多聞院長実房英俊が記した日記（『多聞院日記』）に類出する備前衛門太郎を取り上げ、彼の日常的な活動から、十六世紀後半の小領主を具体化したものである。日記の記述から復元された衛門太郎の家族関係を基礎にすえ、文禄検地帳の分析などから、土地を多数集積し、水利・林野を占有し、商品流通に深くかかわり、下人を抱えるなど、彼が、朝尾直弘氏の小領主概念にほぼ合致する存在であることを確認した。しかし、十七世紀後半段階でもその勢力を保っている点が朝尾説とは異なり、多様な活動から小領主の精農化志向に対して疑義を呈した。

また、従来の小領主を巡る議論に関して、以下のような点を述べた。①小領主は、上層に領主化を遂げる国人層、内部に小農によって構成される村中の間に立つ中間層であるが、両者以上に村の領域を意識し、村の内・外の性格が異なっている。村の内

部では地主化を遂げ、外では領主的な一面もうかがわせるが、行政能力を有し、後の大庄屋へと展開しうる官僚的な性格を持っていた。②備前氏の活動は、興福寺僧の英俊を含めて、惣領である十市氏との家父長制的な関係に裏付けられていた。荘園領主である寺社の内部構造と在地社会の変動をあわせて把握する必要がある。③近世知識人の第一世代として、小領主をとらえるとすると、彼らは寺社から医療に代表される高度な知識を優先的に獲得し、〈知〉の在地への広がりを支えていた。知識の源泉が寺院であるとすれば、近世における宗教と人々のかかわりを先取りし、幅広く展開していく近世宗教に対してイニシアチブを持ったと思われる。